

学習課題(中学校3年生)

【国語】



<学習内容>

○教科書の「初恋（P140～141）」を読んで、語句や表現に込められた思いを想像し、この詩にふさわしい朗読の仕方について考えてみよう。

<取り組み方>

(1) 「初恋」の詩を2回声に出して読み、気付いたことをまとめてみよう。

○詩の形式や表現などについて

- ・何連からできている詩だろうか？
- ・使われている言葉やリズムからどのようなことを感じただろうか？

①使われている言葉が現代の話言葉か、昔の言葉遣いか。

→「口語詩」もしくは「文語詩」

②音のリズムにきまりはあるかどうか。→「自由詩」もしくは「定型詩」

※①と②の当てはまる形式を組み合わせ、次のどれになるか考えてみよう。

→口語自由詩、口語定型詩、文語自由詩、文語定型詩

○詩の内容について

- ・どのような情景が思い浮かんだらうか？
- ・どんな印象をもっただらうか？
- ・連想したことは何だらうか？（好きな本、マンガ、曲、ドラマ……）

(2) この詩に込められた作者の思いを想像し、①～③について自分の意見をまとめてみよう。

①「初恋」という言葉から浮かぶ印象やイメージを箇条書きでまとめてみよう。

※人が初めて恋をした時、どんな気持ちになるか想像してみよう。

②詩に使われている言葉や表現に注目し、連ごとに込められた作者の思いを想像するとともに、どのような朗読の仕方がよいと考えるか、簡単にまとめてみよう。

<まとめ方の例>

- ・第一連には、作者の○○のような思いが込められている。
→○○を表現できるように、◇◇な(い)声で、□□しい感じで朗読したらよいと考える。
- ・第二連には、～。
- ・第三連には、～。
- ・第四連には、～。

ヒント①

第一連は「少女との出会い」

第二連は「恋心の芽生え」

第三連は「恋の成就」

第四連は「恋心の高まり」を、それぞれ表しています。

ヒント②

第一連「まだあげ初めし～見えしとき」

→『林檎の木の下で、まだ前髪を上げたばかりの少女を見た時』

第二連「薄紅の秋の実」→少女を例えた隠喩表現。

第三連「こころなき」→『無意識の。思わず』

「恋の盃を～酌みしかな」→『恋に酔う』という意味の比喩表現。

第四連「おのづからなる細道～誰が踏みそめしかたみぞと」

→『自然とできたこの道は、いったい誰が踏み固めた跡なのだろう』

③詩を通して感じられる「作者」が「少女」を思う気持ちに対して、自分が感じたことを簡単にまとめてみよう。

（視点例）

- ・言葉の表現について
- ・言葉のリズム感について
- ・作者が少女を思う気持ちについて
- ・当時（明治時代）と現代の恋心の共通点、相違点 など

(3) (2)でまとめたことを家の人に伝えてみよう。

【チャレンジ課題】（できそうな人はやってみよう！）

◎「初恋」の詩の内容をもとに、物語を自分で書いてみよう。

- ・第一連から第四連までの流れを変えずに、作者「島崎藤村」視点の物語を作ってみよう。
- ・登場人物は「私（島崎藤村）」と「少女」。連ごとの「私」の思いを想像し、心情描写と情景描写に挑戦してみよう。
- ・作品が完成したら、家の人に読んでもらおう。

※(2)に取り組む中で気付いたことや考えたことについて、取組シートに記録しておこう。

※(3)について、家の人に伝えるのが、どうしても難しい場合は、目の前に家の人があると想像して、自分の考えを声に出して説明するというだけでもかまいません。